

程極明 著 『洪流』

連載第二回 (5~9)

抄訳 井手淑子

5 小宝の姉、秀華

1938年の春節後、林家の一行

『これまでのあらすじ』

1937年7月の盧溝橋事件の時、主人公の小宝は8歳の小学生。8月からの日本軍の南京空爆は日増しにひどくなり、一家は10月末に、長江沿いの蕪湖に逃れた。しかし日本軍の作戦変更により、街は十日十晩焼かれた。

その間に南京では、12月13日から6週間、市内に入つた日本軍により、多くの無辜の市民が老若男女を問わず殺され、死体は長江にあふれ、通りにも凍つたまま長く積み上げられた。(いわゆる南京虐殺)。

当時南京にいたドイツ、アメリカ、イギリスなどの外国人が安全区を設け、避難民を助けた。しかし、そこも安全ではなく、やつてきた日本兵が多くの若い女性を連れ去り、強姦し、恥辱にまみれた彼女たちは、長江に身を投げ、戻っては来なかつた。

小宝一家は翌年の春、すっかり荒れ果てた南京に戻つた。中国の未来に不安をもつ若者たちは、仲間を求め、グループを結成したり、中国共産党やその指導下にある新四軍などの抗日組織へとつながりをもとめていった。小宝の姉、秀華と友人たちも、高校生としてその輪の中に入ろうとしていた。

んだ。

金女大の難民避難所は役目を終え、華女史は多くの中国人から「生き佛」と言われたが、この美しい校庭と職員を守るために、付属の中学校を作り、全寮制によつて女学生の安全も図つた。小宝の一一番目の姉、秀

*連載第一回(1~4)はホームページ「時事評論・エッセイ」欄・第11回(2016年10月)でご覧いただけます。

華も入学した。

秀華にはこの学校はまるで宮殿のように感じられた。美しい緑の芝生、ホール、光沢のある床・・・。そして校舎の前の広い駐車場、一本の小さな道があるのが目にに入った。それは、当時1万人以上の難民が毎日お粥をもりこに通つた道であり、彼女が学校を卒業するまでずっと草が生えなかつた。それは彼女に、あの悲惨な日々を忘れてはいけないと注意を促してくれた。

秀華はそれを手伝つた日の夜は、よく眠れなかつた。ガツガツと食べる子、一杯食べたりせつ一杯と要求する子の光景に彼女の心は痛んだ。

イリノイ大学を卒業後、伝道と学校開設のために中国にやつてきた。1の19年以来ずっと金女大で働く。特に抗日戦争で、校長が後方に撤退してからは南京の学園を守る責任を負つた。

彼女は学生には愛情深く、かつ厳

しく接した。毎日学生と食堂で風食

をとり、学生たちの状況を理解し、かつ彼らの会話の訓練をした。校内に野菜畑を開墾し、学生たちに世話をさせた。また食後の茶碗洗いや食堂の掃除もやらせた。更に学生たちが人々の生活を理解するよう、定期的に、近所の貧しい子供たちにお粥を施した。

秀華はそれを見た。彼女の言ふとおりの影響で、宗教問題ではどうしても共に語れなかつた。彼女たちは礼儀正しく授業を聞き、聖歌隊にも参加していたが、多くのもの

はキリスト教を受け入れなかつた。

英語力もある秀華は、友人らと華女史に問いかけた。「神が万能であるなら、神はなぜ日本帝国主義を処罰しないのか?」「汝の右の頬をぶたれれば、左の頬を差し出せというが、私たちは日本鬼子にもやうするのか?」など、華女史には答えようがなかつた。

秀華は初めて彼女の家を訪ねた時、呆然とした。

窓もない部屋に一台の木のベッド、テーブルと2個の丸椅子。ドアの前に鍋が一つ。

なぜ自分の家は豊かなのか?なぜ彼女の家があんなに貧しいのか?

不公平なのか? 色々と考えさせられた。

小宝の姉の秀華は、金女大付属中の比較的自由な環境の中で、外国の放送・新聞や重慶テレビなどに接し、戦局の状況を知り、友人もできた。

一人は江小英。母は幼い頃に童養媳として売られ、南京に逃げてきたという。父は出稼ぎに出たつたりで、

母の住み込み先の金女大教授の励

ましによつて、ひたすら勉強し、首席で入学、奨学金を得た。

三人は他の四人のクラスメート

と《七姉妹》といつ愛国的グループを秘かに結成し、戦局についてのナイスカッショソもよべした。

こうして中国共産党が抗日下の南京に設立した最初の地下党组织、南京市特別党支部が誕生した。

1940年の夏休みを郷里の常州で過(じ)した武志華は、小学校教師の康琴と隣り合わせになつた。休暇中に度々会い、《七姉妹》のことなど話をすよにこなつた。年上の康琴は彼女たちの自発的な行為に感心しつつ、少數の積極的分子で、多くの学生ひとりながらではなく、政治的方向性もないが、これらの中学生の中にも、抗日鬪争への積極性が埋もれていたことをつかんだ。

彼女は最後に、自分が新四軍中共地区委員会の幹部であることを明かした。

康琴は《七姉妹》のメンバーにそれを伝えた。そして彼女は小学校教師として南京に来ることになつた。

まもなく、武志華も入党し、日本

1941年の冬休み、江小英が最初の地下党員となつた。彼女が一晩中眠らざに考へたこと一一からい頃よくお腹がすき、夜中に目が覚めたこと、貧乏で三人の兄の病気を治せず、両親が近くの山に埋めたこと等。更に祖国が遭遇してくること。

統治下の南京に小さな灯がともされた。

『どうすればいいか話してこねんだ。』

と前置きして、一人の「初めての抗日の闘い」を話した。

7 初めての上海

汪精衛政府が成立した日のこと。

日本軍は南京占領後、国民政府の投降派と手を結び、やがて1940年3月、汪精衛が南京に「国民政府」を設立した。

小宝は小6の春休み（4月）、商用の父について初めて上海に行つた。大叔父さんの家で従兄の希虎に会った。有名な江蘇省立上海中学校（省上中）に通う高校生である。

希虎は、やうやく中学生になる小宝に希鷹の様子も尋ね、『一人で遊びだけでなく、ひとつ勉強し、中国の将来にも関心をもたなくてはね』と叫んだ。すると小宝は『僕たち、ない。』

『僕たちもただうつぶんを晴りしているだけで、日本鬼子なんか倒せない』と叫んだ。『当たつ前だよ。すぐに倒せぬも

日本旗を見ゆといゝ悲しきなる。』

のじゃないよ。』

『畠田、今はフランス租界に移つて
いる学校を案内しながら、希虎は自
分たちの鬭いについて話した。

『省上中には「学協」という抗日
組織があり、多分上海の中学校では
一番だ。日本人は上海を占領してい
るが、蘇州河以南の公共租界とフラン
クス租界は、まだ英仏政府の管理下
にある。

中学・高校にはみなクラス会があ
り、クラス連合会は進歩勢力に指導
されている。国民党の青団はあるが、
まだ大きな勢力でなく、協力して共
に闘っている。読書会や授業などで、
様々な議論もした。

孫中山先生の「革命未だ成らず。
同志はなお努力を—」の呼びかけに
応え、汪精衛政府成立の日から3日
間の授業放棄を決定した。全華の學

生千人が集会を開き、追及された一
人の教師は学校を去った。』

『スゴイ！ 僕たちも南京に戻つ
たり・・』と勢いづく小宝に、希虎
は『君たちには上海租界のような環
境はない。やり方がまぎれれば、す
ぐに逮捕される。やつべつと一日一

日積み上げていく困難な仕事なん
だ。大衆の自覚も支持もなく、ただ
少数の者のみに頼って、考えなしに
やつてはいけない。慎重にね。』

小宝は自分はまだまだ幼稚だ
と思った。

8 畠田へ、若者たちの決意

1930年の夏、共産党主力の新
四軍の部隊はゲリラ戦により各地
に根拠地を設けた。秀華ら「七姊妹」
は武志華の案内で近くの遊撃区を

訪れた。秀華は興奮してそれを小宝に話した。

林家の店員にも動きがあった。小王と小陸の一人が、南京の対岸の六合に行き、遊撃隊に参加すると言えた。

小陸は『ねえ秀華、僕は父母が誰かもわからぬ孤児だと知つていねでしょ。10歳で親戚に連れられ南京に来た。幸い大旦那さんに引き取られ、成人まで育てて下さった。御恩は一生忘れない。でも綿糸・綿布は日本軍に統制され、この店も倒産するかもしれない。日本鬼子の残酷行為も随分見て、この国を何とかして救いたい。前は国民党と蒋介石を信じていた。でも国民党では決して我が国を救えないと、思えてきた。

愛國的な抗日の店員たちと一緒に新四軍に身を寄せた。彼らが本当に

抗日であるなり、彼らの所でやる。もし理想通りでないなり、自分たちで隊伍を組みゲリワ戦をやる。』と

言った。

小王も『妹は日本鬼子に辱められ、自ら命を絶った。母も首を吊って死んだ。僕にはもう家はなく、肉親も失つた。祖国が日本鬼子に蹂躪されているのに、一人前の男として何もしないわけにはいかない。遊撃隊に参加すべきだと思つ。妹と母の仇を討つ。中国人民の為に仇を討ちに行く。』と。

母と妹が亡くなつてからあまりしゃべらず、恨みを心の底にしまつていた小王の言葉に秀華は感動し、幾ばくかのお金を差し出した。

店主の林明卿は彼らの残した手紙を読み、何も言わなかつたが、この子たちは見込みがあると認つた。

林家の料理番の孝老三の家は六合にあり、彼は一、三ヶ月は家を見

9 「團結救國社」の誕生

に、またお金を届けに帰つていた。

戻つてみると秀華や小宝に、《老四》《囚籠》が農村でじつしているか、農民を手伝つて稻を植え、水を汲み、薪を伐るなどして、農民たちが彼を自分の子弟のように思つていふことなどを語つた。

家には年老いた母一人。新四軍は母をよべ世話をしてくれた。《老四》

《囚籠》は農民たちの、新四軍に対する愛称であった。母も、彼が新四軍に参加するに賛成した。郷里の傀儡軍も村長も表面は日本鬼子に恰好をつけているが、実際には抗日のために働く、《老四》の指揮に従つてゐるといつ。

(訳註) 華中・華南の根據地の紅軍が国民党の攻撃を避け、長征に出た後、各地の殘留部隊が国民党政府の承認を受け、「新四軍」を結成した。

それは敵の力が強かつただけではなく、あまりにも「左翼的」な方針で、民衆とかけ離れていたこと。周恩来は若者たちが「勉学に励み、仕事に励み、広く友人と交わる」とうに提起した。いかに合法的に民衆を団結させるか? 力を蓄えさせらるか?

南京に教師として来てから、秀華の友人の江少英と武志華の一人を党員に迎えたが、茅山根據地で学んだことをどう活かすか、必死に考えた。中国共産党は一の二一年に上海で産声をあげ、南京ではこれまでに8回も委員会が生まれたが、全て失敗、多くの犠牲者を出した。

その地区の新四軍幹部の康琴は、

南京に教師として来てから、秀華の友人の江少英と武志華の一人を党員に迎えたが、茅山根據地で学んだことをどう活かすか、必死に考えた。

二人に相談し、中央大学の愛国的青年と金女大付属中の女学生を、一つの抗日地下組織に結集することを提案した。

いつも1941年の夏、《団結救国社》という秘密組織が誕生した。青年たちは康琴が根拠地から持つて来た毛沢東の『持久戦論』や艾思奇の『大衆哲学』などの本をむさぼり読み、議論した。また『新知識』というパンフレットを発行し、抗日のコースを云ふことにした。

秀華は一階の一一番奥の部屋に一人で住んでいたので、夜に重慶と延安の放送を聞き、ニュースにして自分で蠅原紙を切った。それを小宝が任建（中央大学の学生）の所に持つていも、任建が小冊子に印刷した。小宝は姉がラジオを聴きガリ切りしている間、入口で見守った。い

つの間にか眠ってしまった小宝に秀華は濃いお茶を飲ませた。それは彼の習慣になってしまった。

袁倫（同じく中央大学生）も秀華

に、くれぐれも慎重に、万に一つの失敗もないようにと云い聞かせた。もし日本憲兵隊が捜査に来たら、ラジオ、ヤスリ板、蠅原紙をじうつまく隠すが、どうやって眠つたふりをするかなど考へ、実地訓練もした。この印刷物が日本鬼子に見つかつたら死刑になる筈だった。

1942年夏からソ連のスター・リングワード攻防戦が始まり、全世界が注目した。秀華は『新知識』の中での戦いを追つた。小宝の心もそれに従い揺れた。

《団結救国社》のメンバーは、よく郊外遠足に出かけ議論した、小宝も従兄の希鷹と一緒に傍で遊び戯

れ、警戒に当たった。

印刷物をどうやって届けるかは、厄介だった。少年一人は「吉田洋行」というハンコを彫り、包装し住所を書き、その印を押した。

夕食後、大きなカバンを背負った二人は、郵便ポストに一個ずつ入れていき、一人が見張り役をした。当時はまだ郵便局から一度に送ることができなかつたのである。

(つづく)